

「外科病棟マニュアル―病棟担当医のチューブマネジメント」

田 辺 達 三 編

鹿児島大学教授

島 津 久 明

近年、外科診療の高度化に伴い、周術期の患者管理も複雑の度を加えているが、その一面を反映するものとして、チューブ、カテーテル、ドレーンなどの使用機会が著明に増加していることが注目される。手術操作部の局所コントロールのためにドレーンが挿入されることも、ほぼ日常である。重篤な患者ほど、また大手術の術後ほどその数は多くなる。外科病棟の主治医団が多忙をきわめているか否かは、担当する患者に挿入されているチューブ類の総数を患者数で除した商、つまりチューブインデックスとでも呼ぶべきものによって代弁されるというジョークも聞かれるほどである。これらのチューブ類はもちろん、それぞれ目的をもって使用されるわけであるが、その適応、挿入の基本手技、予測される効果、合併症などについて十分な認識をもって行うべきことは論を

またない。不適切な実施は有害無益である。

ところで、こうしたチューブ類の適正な使用、あるいはそれにまつわる問題点について系統的に解説した指導書がこれまで世に出たことはなかったのではなかろうか。このたび、北海道大学外科田辺達三教授により編集され医学書院より出版された「外科病棟マニュアル―病棟担当医のチューブマネジメント」は、その意味で大いに注目に値するものである。大変時宜を得たものであり、しかも内容的に素晴らしく、非常に利用価値の高いガイドブックである。

本書の構成は、1. 病棟患者管理とチューブ、2. 適応と挿管・抜管のテクニック、および3. チューブマネジメント、の3章から成っているが、全体を通じての特徴を列記してみると以下のとおりである。すなわ

ち、1) 内容的に一般外科病棟におけるチューブマネジメントの必要事項がほとんどすべて網羅されている、2) 記述が非常に要を得て簡潔で、原則として箇条書の形式がとられている、3) 解説が常に実践的・具体的である、4) 本文 212 頁のなかに 150 の図と 15 の表が含まれ、理解の便宜が配慮されている、5) それぞれの項目の最後には、pitfall と題して生じやすい問題点や合併症が解説され、注意点が喚起されている、6) 内容が up-to-date である、などの点である。最後の癌動注化学療法項では、最近いろいろな施設で活用されるようになった皮下埋め込み式のリザーバー付カテーテル infuse-à-port も取り上げられている。

以上のように、本書は外科病棟におけるチューブマネジメントを極めて実践的に的確に解説した名著である。非常に親しみやすい感じを与えるのもよい。現場の経験を豊富にもった田辺教授御門下の優れた執筆陣をもってしてはじめて、その完成をみるのができたことは間違いない。外科病棟に勤務する研修医や若い外科医の方々が座右の書として大いに活用されることをお奨めしたい。

A5 判 224 頁 図 124 写真 6 1988
¥3,400 円 300 医学書院 刊